

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会

2017・新春号

会員のみなさまにおかれましては、健やかに新春をお迎えのことと心からお喜び申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い致します。去る12月11日に年次総会を終え、看護職の会も、2016年度(2016/10月～2017/9月)が本格的に始まりました。今年度は、国際アントロポゾフィー看護 基礎コースの2巡目が終了する年でもあり、新たな修了生が巣立ちます。アントロポゾフィー看護がこの地で生かされていくことを心から願います。

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会 運営委員一同

新春号からの企画として、「アントロポゾフィーにおける栄養学」を薬剤師の江崎桂子さんの寄稿、3回シリーズでお届けします。

第1回

私たちは食べたもので作られるのでしょうか？

江崎桂子

みなさん、今日は何を食べましたか？ 美味しくいただけましたか？

毎日のように食べている食事ですが、どうやって私たちの栄養となるのでしょうか？ 今日、食にまつわる様々な問題が世界中でおきています。

食物アレルギーは生まれてくる子供たちの多くに見られます。それぞれの国にまた民族に特有の伝統的な食事があります。多くはそれぞれの地域の宗教的背景を持つ行事にまつわるもので、その土地の食材を使っています。しかし、今日では海外の料理が手軽に食べられるようになってそういった形態は徐々に崩れてきています。また、季節に関係なくいつでも様々な食材が手に入るようになり、旬を知らない人が増えていきます。このように食文化が変化する中で1960年代から食物アレルギーが増加しはじめたと言われています。もちろん、自然環境の変化、生活スタイルの変化などほかにもアレルギーの要因となりそうなことはたくさんありますので、一概に食事の変化だけによって食物アレルギーが広がったとは言えませんが、最近の研究でアメリカ、オハイオ州のアーミッシュの人々は、昔ながらの伝統的な食事や生活スタイルを継承していてアレルギーの発症率が低いというデータもあるようです。牛糞の中に抗アレルギー物質が含まれていることが発見され、動物の世話を幼いころから

している事が関係しているのではないかとされています。またシュタイナー学校の卒業生を追跡した調査では、他の同世代の子供たちに比べてアレルギー疾患の発症率が低いというデータも出ています。

そして様々な食スタイル、例えばグルテンフリー食、澱粉ダイエット、他にも健康にいいといわれる食品の情報が溢れています。まるで私たちの体は、食べたものの、栄養素が十分に取ればそれで健康でいられると受け取れます。では栄養素が不足したときサプリメントで補えば十分なのでしょうか？

バーゼルで有名な生理学者の弟子が、ネズミに餌としてミルクを与えたところ発育が良かったので、ミルクの成分を与えればよく発育するだろうと考えました。そこでミルクの成分であるカゼイン・脂肪・糖分・塩類を与えるという実験をしました。ところが、そのネズミは数日後に死んでしまったそうです。つまりミルクには栄養成分だけではない何かが関与しているということが分かったのです。

では、実際のところいったい何が私たちの体を、健康を作っているのでしょうか？

まず食物の消化プロセスから見ていきましょう。私たちは食べる時、最初に食べ物を口に入れます。口に入ってくるものは、私たちの体から見れば調理してあるが生のままであるが全て外にあるもの、内にあるものではありません。ですから、体にとってはどんなに美しく美味しく優しく料理されていたとしても、残念ながら異物を含んでいると言わねばなりません。私たちの体にとって異物はいわば毒ですから、それを外に出そうとする働きが生じます。それをカール・ケーニツは「食べることは常に毒をなくすプロ

セスだ」と言いました。食べるということは消化プロセスを通してその人の体にとっての毒を消す、取り去ることなのです。

食べたものが口に入ってくると、精妙にできた私たちの体はすぐに消化のプロセスを始めます。唾液が分泌されます。大きな唾液腺として顎下腺、舌下腺、耳下腺があり、それぞれ微妙に質の異なる唾液は、何を食べたかによって分泌される割合が微妙に変わります。腺はどのようにして何を食べたか知ることができるのでしょうか。カール・ケーニツヒによれば、腺には二つの働きがあるのです。これまで消化液を分泌する機能だけが注目されてきましたが、実は感覚器官としての働きもあるのです。すべて口に入れたものが、かみ砕かれたり溶けたりする際に内側で鳴り響き輝きます。唾液腺はこれを受け取り、唾液を分泌するのです。いうなれば響きを知覚する、口に入れた食べ物の内的な言葉を聞くことで、唾液を美しく正しく精密に食べ物に与え、その力を受け取るのですが、これは神経で行われるものではありません。唾液は、条件反射で食べ物を見たり想像するだけでも出てきます。実際に食べていなくても味や香りを思い描くことで内的に再現されたこの響きを受け取っていると言えるのではないのでしょうか。このように口の中で食べ物と唾液がまじりあい、主に炭水化物が分解されます。次に胃に運ばれ、そこでは主に動物性または植物性のタンパク質が分解されます。胃では食べたものはその元の姿が壊され、食材の構成成分となり溶けて、胃腺が輝きを見、鳴り響く音を聞き、この共演から正しく胃液を分泌するのです。そして異物性はほとんどなくなります。ですから胃で消化がうまくいかないときには感覚器官が不調で胃液が正しく分泌されていないのかもしれません。

続いて第三段階の小腸に向かいます。ここまでの間に食べたほとんどの物が消化され炭水化物は姿を消し、タンパク質はあったとしてもごくわずかです。そして小腸では、主に脂肪が消化されます。小腸では食べたものはおかゆ状のもの、乳糜と呼ばれるものになります。この中に脂肪は細かな滴のように存在します。小腸はたくさんの絨毛で覆われていますが腸壁と言われるように、まさしく「壁」なのです。乳糜はこの壁を通して行けません。形態を有していると壁を通っていけませんが、液状になったものは絨毛から取り

こまれ、次第に重さを失い、重力に支配されない超感覚的なものへと変化していきます。そしてリンパ管に入ってきたものは、血液と共に上方に向かい、脳に堆積して灰白質（神経線維の部分）を構築するとカール・ケーニツヒは言っています。

ここまで消化プロセスを見てきました。ここでルドルフ・シュタイナーは、栄養について私たちの体に入ってくる物質的な流れだけを眺めるのではなく、宇宙的な栄養の流れも見ると言っています。私たちが口にするのは、動物、植物、鉱物です。植物は鉱物（ミネラル）を取り込み、それぞれの形態を作っていきます。形態を作っていく過程には光、水、空気、そのほか見えないけれども宇宙からやってくる星々の力が働いています。草食動物はもっぱら植物を、肉食動物はもっぱら肉を食べます。人間は、植物と動物を食べますが、鉱物（塩など）はごくわずか調味に使う程度です。そうすると鉱物から直接形態を作ることができるのは植物だけだとわかります。体内で消化される過程で、食べ物から放たれる響きや光を受け取るという流れと消化液を分泌する流れがあると書きました。植物が形態を作る過程で取り込んだ光や音（光エーテル、化学エーテル）は形態が壊されていく消化プロセスの中で放出され、それを感覚器官である腺が感受して消化液を放出しているのです。ここに二つの相反する流れが見られます。

ところで、エーテルには何かをつなげる働きがあります。口にした物、例えば肉や魚が形を残しているうちはその生命固有のエーテル体の働きがあるということです。そして、このエーテル体は私のエーテル体ではないので、それが残っている物は私の体の素材として使うことはできません。消化プロセスではこのエーテル体を外していくことになります。これが解毒、異物性を体から消していく作業です。その一方で宇宙からの流れを受け取る作業でもあるのです。消化プロセスで口に入れた物質実質は先に書いたように分解され、ようやく素の栄養素として体内に取り込まれ、そこから超感覚的なものへと変容していきます。見えない世界からの力を開放する上方へ向かう流れがあり、それに相対する上方の見えない世界から下方へと流れる力がやってきて、私たちの体は構築されるのです。死と再生の一つの姿が見られます。

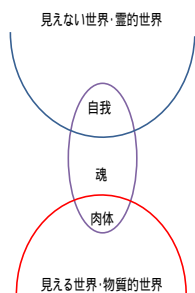


図 1

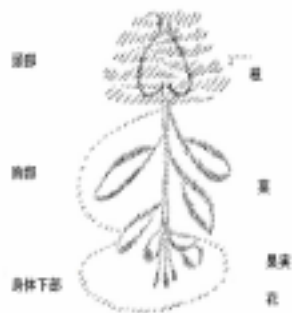


図 2

私たちは消化のプロセスが、見えない世界と見える世界をつないでいることを知りました。私たち人間もまた、図 1 に示したように、下方にある目に見える物質的世界と上方の目に見えない世界・霊的世界をつないで真ん中に魂をもって生きている存在です。そして、植物と人間は図 2 のように、人間の頭部、胸部、下部と植物の根、葉、果実・花の部分が対応する関係を持っています。植物の形成に宇宙からの流れと地上からの流れが働いているように、人間を通して、この相反する二つの流れが行きかっているのです。

パンは私たちを養うのではない、
 私たちがパンの中に味わうのは、
 神の永遠の言葉であり、生命と精神なのである。
 (アンゲルス・シレジウス)

私たちが受け取るのは宇宙的栄養の流れで私たちに入り込む全世界の光と命であり、物質的栄養を受け取ることで宇宙的な栄養の流れが私たちに正しく流れることを活気づけ、宇宙的な流れの担い手となるのです。伝統的行事の際の特別な料理が宗教的背景を持つことを考えてみれば、食材を育て料理することの中に流れる神聖なもの、この宇宙からの流れと宇宙へ向かう流れを感じて人間が生きてきたことがわかります。情報に溢れた現代に生きる私たちはこのことをつい忘れがちです。しかし、調理の際そこに思いをはせ、食べる人に思いをはせ、ビタミン I (愛) を忘れないことが、どれほど料理にそして消化吸収に影響することでしょう。時間に追われて、せかせかと落ち着かなく食べるのではなく、食卓に着いて感謝や祈りをもって食べ始める神聖な行為に含まれる消化プロセスの二つの流れを感じ味わいたいものです。

さて、消化プロセスで見てきた炭水化物、タンパク質、脂質はその含有量に違いがあるにしても、人間が

口にする全ての動植物に含まれています。消化を通して体内に取り込まれた素材がどのように超感覚的に変容していくかを含め、次回は栄養素について詳しく見ていく予定です。

参考文献：カール・ケーニッヒ 「栄養学」(ドイツ語)
 ルドルフ・シュタイナー著 西川隆範訳「体と心が求める
 栄養学」ルドルフ・シュタイナー＋イタ・ヴェークマン著
 浅田豊＋中谷三恵子訳 「アントロポゾフィー医学の本質」
 ルドルフ・シュタイナー著 西川隆範訳 「健康と食事」

プロフィール

江崎 桂子(えざき けいこ)

子どもが縁でシュタイナー教育と出会い土曜クラスの運営に関わり渡独。治療教育を学び帰国後、社会福祉士を取得。作業所利用者とライアーの時間をもち、札幌、蒲田、横浜、八王子などで医療者と協働し治療教育を行う。ほりクリニック、すみれが丘ひだまりクリニック勤務。アントロポゾフィーに基づく日本薬剤師協会会員、治療教育家、バイオグラフィーワーカー。

2016年秋(10/9-10)に行なわれた、「国際アントロポゾフィー看護ゼミナール：アドバンスコース」に参加された会員の上山みゆきさんから感想をいただきました。当日のプログラムも合わせてご覧下さい。

国際アントロポゾフィー看護ゼミナール アドバンスコース

平成 28 年 10 月 9 日(日)-10 日(月)

於：すみれが丘ひだまりクリニック

今回私は、アントロポゾフィー看護を実践されている方々の症例検討やテーマをもって取り組んでおられるその実際を知れる貴重な機会だと思い、10 日(月)のみではありましたが参加しました。

村上さんの耳管開放症と診断された方々へのケア：そもそも「耳の構造と機能」という解剖生理学的な視点からの病態理解でしか症状を観察できなかったのですが、アントロポゾフィー観点からの機能面を加えて対象を知ることが、これほど深いものかと感動していました。このアントロポゾフィー観点の理解によって対象をより深く知り、必要な援助を見いだす糸口になることが本当の意味で人間を観るということだと改めて考えさせられました。おきている現象のどこに意識の光をあてているのかということも看護の

12の所作となる要素に連動していくことが実践のお話を通して気づかされたように思います。

千田さんの健康な方への7回の実践展開事例:おそらく誰にでも直面することのある自分自身との対峙。バランスを失い、自分を見失いそうになったとき、アインライビングによって深い自己との語らいを得て、自己信頼という本来の魂の自然な姿を垣間見ることができた、そんな物語のように感じられました。特にアインライビングという技術とともに千田さんの看護の所作が動的な質として編みこまれながら、対象の変容を助けるダイナミックな影響を与えているようにも感じました。

揚妻さんの夜尿症と知的障害のある思春期のお子様へのケア:西洋医学の事例では一般に秋冬に増すという傾向がある中、なぜ夏に向かう時期に失禁が多いのかという発見にとっても驚きました。それは一定のリズムを外的刺激として整えることによって内的な固有のリズムが顕わになるようでもあり、そこにはまだ受肉が未完成であるがゆえの現象として、病気は単なる病気ではない深遠なメッセージをどのようにして引き出せるのか、それもアントロポゾフィー看護の醍醐味のように感じました。

主に症例検討を取り上げさせていただきましたが、あくまでも感じたままに記しておくことをお許しください。それがどのような意味をもちどのような説明ができるのか、まだまだ理解に及ばない側面が多々あります。今後もこのような学びの場を通して自己研鑽を続けたいと思いました。共通してアインライビングという看護の技術が方法論ではなく、皆さんお一人一人の人間性を通して営まれる看護の本質にもふれたような気がしました。心より感謝いたします。

上山みゆき

国際アントロポゾフィー看護ゼミナール アドバンスコース (2016年10月9、10日)	
於: すみれが丘ひだまりクリニック(横浜市)	
症例検討	「偏頭痛を持つ患者へのチームでの関わり」 山本百合子(医師)、中村朱希(芸術療法士)、鶴田史枝
症例検討	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子
症例検討	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子
プレゼンテーション	「7回のリズムをもった施術での気づきの体験」千田恵子
プレゼンテーション	「震災支援におけるアインライビングのつづき」千田恵子
プレゼンテーション	「リズムカルアインライビングと4つのエーテル」村上典子

10月9日(月)		10月10日(火)	
9:00-10:00	開会式	9:00-10:00	開会式
10:00-11:00	「偏頭痛を持つ患者へのチームでの関わり」 山本百合子(医師)、中村朱希(芸術療法士)、鶴田史枝	10:00-11:00	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子
11:00-12:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子	11:00-12:00	「7回のリズムをもった施術での気づきの体験」千田恵子
12:00-13:00	昼食	12:00-13:00	昼食
13:00-14:00	「震災支援におけるアインライビングのつづき」千田恵子	13:00-14:00	「リズムカルアインライビングと4つのエーテル」村上典子
14:00-15:00	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子	14:00-15:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子
15:00-16:00	「偏頭痛を持つ患者へのチームでの関わり」山本百合子(医師)、中村朱希(芸術療法士)、鶴田史枝	15:00-16:00	「7回のリズムをもった施術での気づきの体験」千田恵子
16:00-17:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子	16:00-17:00	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子
17:00-18:00	「震災支援におけるアインライビングのつづき」千田恵子	17:00-18:00	「リズムカルアインライビングと4つのエーテル」村上典子
18:00-19:00	「偏頭痛を持つ患者へのチームでの関わり」山本百合子(医師)、中村朱希(芸術療法士)、鶴田史枝	18:00-19:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子
19:00-20:00	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子	19:00-20:00	「7回のリズムをもった施術での気づきの体験」千田恵子
20:00-21:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子	20:00-21:00	「震災支援におけるアインライビングのつづき」千田恵子
21:00-22:00	「偏頭痛を持つ患者へのチームでの関わり」山本百合子(医師)、中村朱希(芸術療法士)、鶴田史枝	21:00-22:00	「リズムカルアインライビングと4つのエーテル」村上典子
22:00-23:00	「ほりクリニックで取り組んでいる耳管開放症という疾患について」村上典子	22:00-23:00	「夜尿症と知的障害」揚妻由美子
23:00-24:00	「震災支援におけるアインライビングのつづき」千田恵子	23:00-24:00	「リズムカルアインライビングと4つのエーテル」村上典子

次に、12月11日に関東地区にて行なわれた、第25回 公開講座 「第3回アントロポゾフィー薬学における製薬法と薬剤～リズム法、ヤドリギ製剤、臓器製剤、ドロン製剤～ 講師:吉田秀美氏 矢部五十世氏」に参加された、会員の村上典子さんの感想です。
薬学講座シリーズ第4回として、公開講座第26-27回を行ないます。詳細は、会報の最後をご覧ください。
みなさまのご参加をお待ちしております。

アントロポゾフィー薬学についての公開講座、シリーズ3回目は、「アントロポゾフィー薬学における製薬法と薬剤」であった。講師として吉田秀美氏が、製薬法～リズム法について、矢部五十世氏が、臓器製剤・ドロン製剤・ヤドリギ製剤を担当された。

リズムある規則正しい生活が健康を保つということは、アントロポゾフィー医学を知らなくても、耳にしたことがある事実で、誰もが本能的に知っているのではないだろうか。日の出日の入り、春夏秋冬、植物の芽吹きや落葉、1日のリズムがあり、四季のリズムがあり、私達は体内時間を持ち、外に内にあるリズムの中で生きている。

Rシュタイナーは、「生命を理解したいならリズムを研究しなさい、リズムが生命を支える。」と言ったそう。リズムとは、似通った過程を比較的似通った比率で繰り返しふたつの極の均衡をもたらすものである。全ての生命は、変化と反復を通して遂行される。

アントロポゾフィー薬学には、概念だけでなく、実

際の製法がリズムで貫かれているものがある。

ポテンタイゼーション:物質を適切な媒体で薄めたり、溶かしたりする際、特定の時間をかけてリズムカルに動かす。

Rh法(ヴェレダ社):植物の圧縮液は、朝37に温められ、リズムカルに振られ、夕方4に冷やされ、再びリズムカルに振られる。

WALA法(WALA社):植物を収穫直後に細かく切り、蒸留した湧き水に浸け、七日間日の出と日の入りの時刻に強く冷やし、特定の時刻に日光に晒す。日中そして夜を通じて浸出物は37に保つ。最後に植物残渣の灰を入れる。

リズム的製薬方法を行なうことで、アルコールなしでも保存が効くという。

この3つの製造法について、吉田氏から詳しい説明を聞いた後、薬剤師の河端氏指導のもと、それらのリズムの違いを、私達はクリスマスの歌2曲、「さあ、クリスマスの精よ〜」、「もろびとこぞりて」を歌って体を動かすことで理解した。

「私達の世界は、神の御業であることをかんがみると、私達の課題は、霊的な作用を展開できるように開かれた状態にすること。」というR・シュタイナーの示唆の基、先達が宇宙にまで思いを馳せ開発した製法である。

アントロポゾフィーの薬剤は、人間の中で働くプロセス・力と自然の中で働くプロセス・力をアントロポゾフィー的な視点で観察、考察し、作られている。一般の医薬品は、薬効成分で理解されるが、アントロポゾフィー薬剤は、この「プロセス・力」で理解されるのだ。それは、特筆すべき点である。

リズム法の講義の後には、Rシュタイナーの霊的認識から生まれ、関係づけられた原料素材が臓器/器官のために働く「ドロン製剤」についての講義があり、画像を見ながら、動物製剤、ヤドリギ製剤を紹介いただいた。大変興味深い内容であった。

私達が、アントロポゾフィー看護を学ぶときも、外用手当で使用する植物が目の前に立ち現れてくるように学ぶのだが、医療者として薬剤を知ることは、本当に大切なことだと実感した。シリーズを通して、アントロポゾフィー薬剤について語る薬剤師さんたちは、人と自然、そして薬剤への愛に満ちている。

村上典子



【総会報告】

りんごろうそくとクリスマスリースが飾られ、和やかな雰囲気が始まりました。

より良い活動に向けた質問や意見が出され、実りある総会となりました

川池由佳里

【予告】第5回アントロポゾフィー医療研究発表会 (医師会・看護職の会合同)

日時: 2017年3月19日(日)9:30~16:00

3月20日(月・祝)9:30~12:00(時間は予定)

場所: 横浜市都筑区すみれが丘13-3

すみれが丘ひだまりクリニック

内容: アントロポゾフィー医療に関する

実践報告、症例報告、研究発表など

* 詳細が決まり次第会員メールでお知らせします。

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会

<http://www.anthro-nr.jp.org/>

e-mail: anthro-nr@rel-int.jp.org

アントロ会員の皆様からの投稿を随時募集しています



【編集部より】
編集部: 中村さよ子
この会報は会員の皆様と共に作りあげる機関紙として有機的つながりを大切にしたいと考えています。

第4回アントロポゾフィー薬学と惑星との関係

～ 金属と金属製剤、ポテンタイズ、エッセンシャルオイルに関して～



日 時： 2017年 2月26日(日) 13時30分～16時30分

場 所： すみれが丘ひだまりクリニック

参加費： 一般3500円・会員3000円・学生1000円・当日500円増

定 員： 30名

対 象： 看護師、医師、薬剤師、アントロポゾフィーを学ぶ芸術療法士及び身体療法士

講 師： 吉田秀美（よしだひでみ）

アントロポゾフィーに基づく日本薬剤師協会会員、薬膳、ハーブ・アロマ・パッチフラワー講師、日本の薬草を使ってアントロポゾフィー製剤学に基づく薬の研究に専念。

江崎桂子（えざきけいこ）

アントロポゾフィーに基づく日本薬剤師協会会員、治療教育家、バイオグラフィーワーカー。

内 容： 私たち人間は地球を取り巻く宇宙からの影響を少なからず受けています。シリーズ最終回となる今回は、私たちの臓器と関係の深い7つの惑星、7つの惑星と関係深い金属の特性、それが人間のどの器官と関係をもっているのか見ていきます。また製剤の例をあげて製法・使い方などをお伝えいたします。製剤プロセスで行われるポテンタイゼーションによる作用の違い、さらに外用で使われることの多いエッセンシャルオイルを三原理から考察して香りの本質についてお伝えいたします。アントロポゾフィー的に香りを理解することで人間の三分節、四分節とどのように関わるのかを探っていききたいと思います。

申し込み： FAX： 050-3415-3190 Eメール： anthro-nr@rel-int.jpn.org

受付後に確認メールを送ります。その後参加費をお振り込みください。尚、一旦振り込まれた参加費は返金できませんのでご了承ください。（代理出席は可能です）《振込先》 アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会 ゆうちょ銀行 00110-9-726537

お申し込みの際には、必ず専門職名と関東会場と記載してください。

振り込み用紙の半券(領収書)か、入場券の代わりになりますので当日お持ちください。

すみれが丘ひだまりクリニック

〒224-0013 神奈川県横浜市都筑区すみれが丘 13-3



* 詳しい会場までの交通に関しては、裏面にご案内しています。詳しくは、すみれが丘ひだまりクリニックのホームページをご覧ください。

www.yamamoto-kinen.or.jp/free_medical

第4回アントロポソフィー薬学と惑星との関係

～ 金属と金属製剤、ポテンタイズ、エッセンシャルオイルに関して～



日 時： 2017年 3月 4日(土) 13時30分～16時30分

場 所： 大阪市難波市民学習センター 第3研修室

参加費： 一般3500円・会員3000円・学生1000円・当日500円増

定 員： 30名

対 象： 看護師、医師、薬剤師、

アントロポソフィーを学ぶ芸術療法士及び身体療法士

講 師： 吉田秀美（よしだひでみ）

アントロポソフィーに基づく日本薬剤師協会会員、薬膳、ハーブ・アロマ・パッチフラワー講師、日本の薬草を使ってアントロポソフィー製剤学に基づく薬の研究に専念。

江崎桂子（えざきけいこ）

アントロポソフィーに基づく日本薬剤師協会会員、治療教育家、バイオグラフィーワーカー。

内 容： 私たち人間は地球を取り巻く宇宙からの影響を少なからず受けています。シリーズ最終回となる今回は、私たちの臓器と関係の深い7つの惑星、7つの惑星と関係深い金属の特性、それが人間のどの器官と関係をもっているのか見ていきます。また製剤の例をあげて製法・使い方などをお伝えいたします。製剤プロセスで行われるポテンタイゼーションによる作用の違い、さらに外用で使われることの多いエッセンシャルオイルを三原理から考察して香りの本質についてお伝えいたします。アントロポソフィー的に香りを理解することで人間の三分節、四分節とどのように関わるのかを探っていききたいと思います。

申し込み： FAX： 050-3415-3190 Eメール： anthro-nr@rel-int.jpn.org

受付後に確認メールを送ります。その後参加費をお振り込みください。尚、一旦振り込まれた参加費は返金できませんのでご了承ください。（代理出席は可能です）《振込先》アントロポソフィー看護を学ぶ看護職の会 ゆうちょ銀行 00110-9-726537

お申し込みの際には、必ず専門職名と関西会場と記載してください。

振り込み用紙の半券(領収書)が、入場券の代わりになりますので当日お持ちください。

難波市民学習センター

〒556-0017 大阪市浪速区港町1-4-1 大阪シティーエアターミナル(OCAT)ビル4階 研修室



【地下鉄】 御堂筋線・四つ橋線・千日前線

「難波」駅下車

【JR】 「JR 難波」駅上

【私鉄】 近鉄・阪神「大阪難波」駅、南海

「難波」駅

【市バス】 「JR 難波駅前」下車すぐ